

脳神経内科疾患での画像の役立て方： 脳神経内科医との対話

序 説

横田 元*

編者としてご依頼を受けた当初、「神経内科疾患のMRI」というテーマで、脳神経内科の先生方がどのようなことを考えているのか、そして最近話題の疾患に触れては、というご提言を編集委員からいただいた。それならば、脳神経内科の先生方にご執筆いただくしかないのでは、と今回の企画を立てた次第である。

このような、他科の先生に全章を執筆いただく企画は、画像診断関係の特集ではあまりみたことがない。直接診察する医師と画像診断医では、参照する情報が異なるわけで、ともすればお互いにニーズや哲学が折り合わないこともあるかもしれない。だからこそ、実際に脳神経内科の先生方がどのように画像を扱っているか、画像診断についてどう思っているかを知ることが意味があると考えた。ただ、私の人脈で執筆者候補を挙げることが難しく、千葉大学医学研究院脳神経内科の杉山淳比古先生に共同編者をお願いし、テーマに対して最適な執筆者を選んでいただいた。

序章として「脳神経内科疾患の診断アプローチと症候-画像対応の地平」を執筆してくださった福武敏夫先生は神経症候学のレジェンドであり、私が医学生時代には大学で脳神経内科のユニット講義を担当されていた。福武先生の講義に魅了され、脳神経内科医になった同級生もいた。私は怠惰な学生であり、当時はその魅力を十分には理解できなかったことを後悔しているが、福武先生に原稿をいただく名誉にあずかることができたことで、

過去の心残りを埋めるような気持ちである。共同編者をお願いした杉山先生には、さらに脊髄小脳変性症について執筆していただき、足を向けて寝られない思いである。脳炎について執筆いただいた半田秀雄先生とともに、毎週火曜日の脳神経内科との画像カンファレンスで議論を交わす、非常に頼りになる同僚（馴れ馴れしいと思われたらごめんなさい）である。さらに、波田野 琢先生 (Parkinsonism)、安藤哲朗先生 (脊髄疾患)、横山和正先生 (脱髄・炎症性疾患)、曾根大地先生 (てんかん)、斎藤良彦先生、西野一三先生 (筋疾患) と、画像診断医でも「あっ、この先生知ってる！」となる各領域のエキスパートの先生方にご執筆いただいた。

本特集では、①各領域の診断、治療過程およびその中の画像検査の利用法、②画像診断医に期待する役割、③最新トピックを盛り込んでいただくようにご依頼した。また、画像診断医の目線を入れるため、④「画像診断医からの質問」という項目を入れ、これが本特集のタイトルである「脳神経内科医との対話」の根拠となっている。この質問は編者にとって役得そのものであり、私が普段疑問に思っていたことを、各分野のエキスパートに直接尋ねる貴重な機会となった。

恥ずかしいので具体的なことはいわないが、原稿を読ませていただき、知らないことが結構たくさんあった。一応、神経放射線をやっている身としては、もっと勉強しなければいけないあとと反省をもって、序説とさせていただく。

* 千葉大学大学院医学研究院画像診断・放射線腫瘍学

Hajime Yokota Diagnostic Radiology and Radiation Oncology, Graduate School of Medicine, Chiba University

序 説

杉山 淳比古 **

これまで出会った熟練の脳神経内科医の多くは、ある程度自分でも読影でき、画像(を活用した)診断に一家言お持ちの方が多かったように思う。とはいえ、自分としては“画像読影”に関して、やはり放射線科の画像診断医の先生方が最も優れていて、脳神経内科医がこれを上回ることはないと思っている。その理由として、そもそも画像診断医の先生の方が画像読影の量・経験が多いことがまず挙げられる。また、脳神経内科医は自身が疑っている疾患を支持する所見があるかどうかに関心を持って画像をみることが多いので、その所見がどの程度特異的なものなのかについての見識が甘くなるように思う。自身を振り返って具体例を挙げれば、進行性核上性麻痺を疑っている患者さんの頭部MRIで、軽度の中脳被蓋の萎縮をみつけて、「進行性核上性麻痺を支持する所見だ！軽度だけど俺はよくみているぜ」と思っていたが、実際は全体的な脳萎縮に伴う変化でも説明可能な非特異的なものだった経験などである。また、脳実質以外の周辺構造の変化など、脳神経内科医が注目しやすい部位以外の所見についても、脳神経内科医では指摘しづらい、あるいは逆に過剰に異常ととらえてしまうため、画像診断医と比べて十分な評価は難しい。

一方で、診断を行う上では、画像検査を行う前の「どのような疾患を、どのくらいの確率で疑っているか」という事前確率の見積りが重要となる

が、これについては病歴聴取や神経診察が元になってくる。また、どの検査をどの部位で依頼するかも、脳神経内科医の役目となる。すなわち、“画像検査を診断・診療に役立てる”には、画像診断医の先生方だけでなく、脳神経内科医の役割も重要となってくるように思う。そして、“画像検査を診断・診療に役立てる”という力を最大化するには、脳神経内科医と画像診断医のコミュニケーションが重要である。そのひとつは、画像検査依頼時の依頼状を適切に記載することであり、他にも病歴聴取や神経診察の結果を適切にカルテに残すこと、カンファレンスの活用などが挙げられる。

今回、横田 元先生よりお話をいただき、共同編者という形で相談して「脳神経内科医との対話」というテーマにしたのも、この脳神経内科医と画像診断医とのコミュニケーションを意識してのことである。編者を務めるのが初めてのため、全体の原稿の査読依頼を受けて、「査読もあるのか、大変だなあ、辛いなあ」と思ったのだが、各原稿を読ませていただくうちに、その面白さに引き込まれ、各先生方の力の入りように「むむむ、すごい！」と思い、そして原稿を出版より先に読ませてもらったことに「いひひ」と思うに至った。

読者の先生方に、画像検査を脳神経内科疾患の診断・診療に役立てる上で、多少なりとも役に立ったと思っていただけたら、これに勝る喜びはない。

** 千葉大学大学院医学研究院脳神経内科学

Atsuhiko Sugiyama Department of Neurology, Graduate School of Medicine, Chiba University